

14

幕末—明治初期の長州藩・山口県における
医学教育・医事行政の展開中澤 淳¹⁾, 亀田 一邦²⁾¹⁾ 山口大学, ²⁾ 九州国際大学

はじめに：幕末—明治初期の山口県における医学教育の展開について、新発見の史料を整理しつつ、その流れをたどりたい。

好生館(堂)における医学教育と医事行政：天保11(1840)年に漢方と蘭方を包括する優れた教授陣により萩城下に開設された医学所は、その名を好生館、好生堂と変えながら、洋学研究の中心的存在になるとともに、藩内医家の支配や疫病防除などの事業を行った。

幕末動乱期の医療施設：萩藩庁は、文久3(1863)年に山口に移転し、好生堂も慶応2(1866)年には山口に移され、病院が併設された。慶応4(1868)年には、蘭学に加えて英学も兼修することとし、米医ベダーを三田尻に招き英学塾を開校した。ベダーは約6ヶ月後に兵庫へと移るが、これを機会に好生堂の塾則が改訂された。

明治元(1868)年11月に山口藩は藩治職制の大改革とともに、好生堂を好生局と改称し、翌2(1869)年10月には好生局を医院と改称して医学教育、病院、衛生局の役割を持たせた。明治3(1870)年9月、藩内の医師は陪臣医から町医、地下医まですべてを医院支配とし、開業医の能力の向上を図るため学業の試験を行った。

中央政府の方針：慶応4(1868)年2月、京都において「西洋医術採用建白」が提出され、御所への西洋医の採用が決められた。東京では明治2(1869)年2月に「医学校兼病院」が「大学東校」となり、翌3(1870)年2月に新政府ではドイツ医学採用が決まった。ドイツからミュレルとホフマンが招かれて大学東校で本格的医学教育が始まったのは明治4(1872)年8月であった。

山口藩のドイツ医学採択：好生堂で蘭医学を学んでいた青木周蔵は、そのほとんどがドイツ語の原書が蘭訳されたものであることに気付き、明治元(1868)年10月に、藩費によりプロシヤ留学を果たしている。ドイツ医学採用への舵切りは始まっていた。

山口県は廃藩置県後の明治5(1872)年4月に、医学はドイツ式によること、漢方のみでは通用しないとの通達を出した。この時期に下関に赤間関医学所が、また厚狭地区に船木医学処が開設され、洋書や翻訳書による西洋医学の研究が行われた。この方針は、同年5月から開始された山口県独自の医術試験(壬申考試)により確かなものとなった。

明治7(1874)年4月に医院を三田尻(防府)に移して華浦医学学校とし、同所に華浦病院を開設した。ここでは医学教育とともに上記医術試験の実施も担当した。経営上の問題から、明治10(1877)年8月に華浦医学学校および病院は廃止となった。その後、明治13(1880)年10月に山口県立華浦医学学校は復活されたが、附属病院の併設が不可能であるため医学学校は明治16(1883)年末に廃止された。

明治7(1874)年に政府は「医制」を定め、同9(1876)年1月に医師開業試験の実施を府県に令達した。従来開業の者にはその地方に限り無試験開業が認められたが、山口県では資質の厳正を図るために、従来開業医にも一率に試験を行なって免許状を交付した。

おわりに：幕末に長州藩と近代日本の方向を見定めていた木戸孝允は、米医ベダーの採用、青木周蔵の外国留学等を助けた。長州医学界最高責任者から、明治2(1870)年3月に大典医に抜擢された青木研蔵は、中央政府の貴重な情報を故郷へ伝えていたと考えられる。地方医学界の中心的存在であった烏田圭三と福田正二はいずれも青木周弼・研蔵の展開した好生堂の後継者であり、烏田は壬申考試の推進者、福田は医学教育者として貢献した。他県では維新以後に外国人教師を招聘して医学学校を発足させたが、山口県では政府の方針にいち早く対応しつつ、自前で新しい医療・衛生対策をとっていった。